

環境教育指導者用
企画立案マニュアル

～明確な目的・目標づくりとその実現に向けて～

長崎大学教育学部 藤本登

1. はじめに

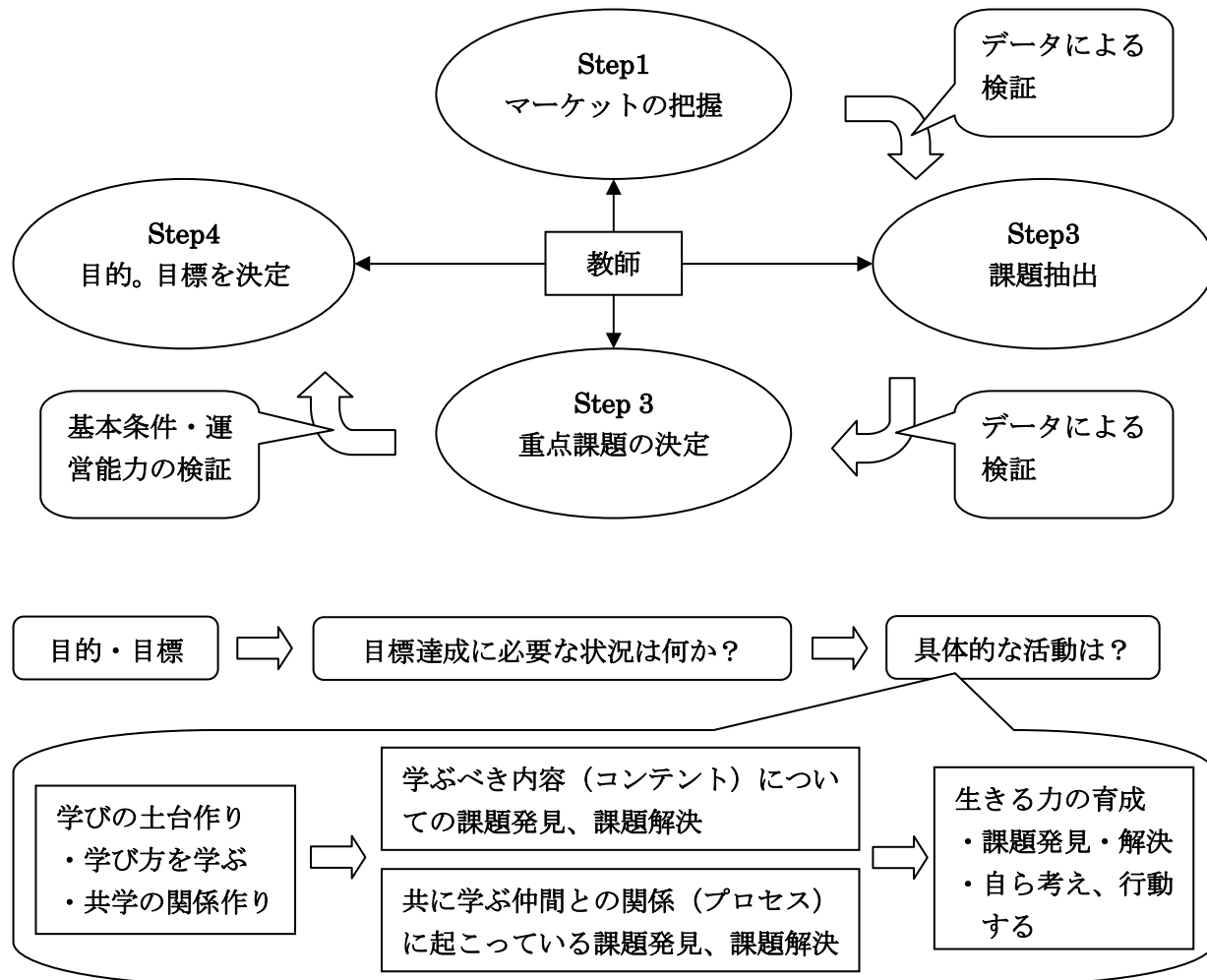
環境教育や総合的な学習の時間における学習では、自然体験などの体験活動を通して、「そこで何が起こったのか」、「なぜそうなったのか」、「そこから何が分かったのか」などを自分自身で考えると共に、共に学ぶ仲間との間で起こっている関係や問題を明らかにし、解決してゆくことが重要であり、学習者の価値観の形成とそれに基づいた自発的な行動を伴います。ここでは、このような学習の企画立案とプログラム作成の基本的な流れについて以下に示します。

2. 企画立案フロー

一般に、教師が問題意識、危機意識や当事者意識が強い場合、色々な思いこみが強くなり、目的や目標が曖昧になります。従って、企画のキーポイントは、教師の思い・願いが思いこみでないでないことを裏付けるための市場調査（子どもやその置かれている環境などの調査）とその分析から目的と目標を明確に決定することです。右図がこのステップを示したものです。このステップにより導き出した「目的・目標」を達成するために活動があるのです。

3. プログラムデザインフロー

プログラムデザインで意識しなければならないことは、企画立案フローから導き出された「目的・目標」をどのような状況や活動から達成し、それと同時に「コンテンツ」と「プロセス」に目を向ける仕組みがなされていることです。このコンテンツとプロセスは車の両輪であり、どちらもバランス良くデザインする必要があります。学びの土台作りでは、学習者が主体的に学び、共に学ぶ仲間との関係を作ることが重要です。また、学習者の興味関心を高め、より効果的な学習にするためには、コンテンツの作成が重要です。さらに、仲間との関係や自分自身との関係を問いかけるプロセスは生きる力の育成に重要な要素です。

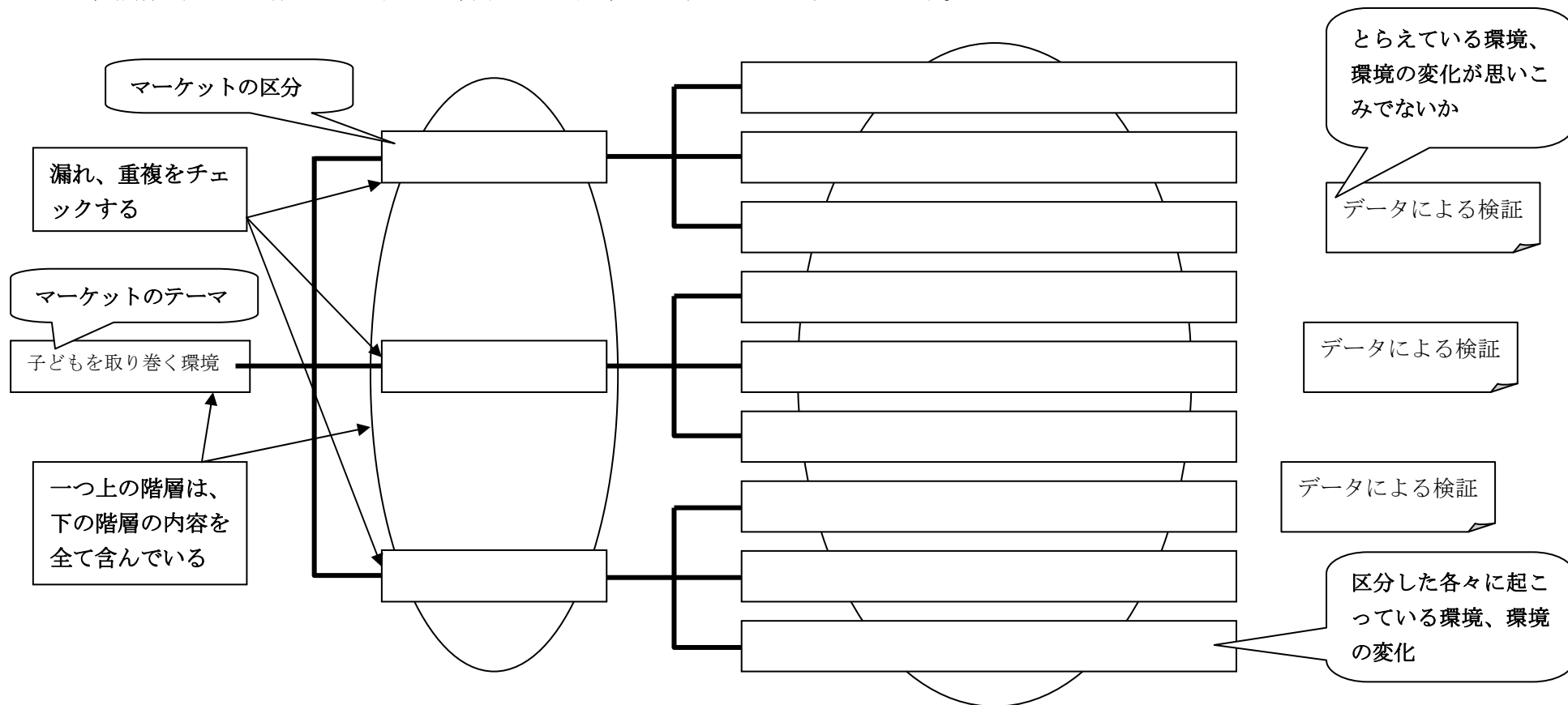


Step 1 : マーケットの把握

Step 1は、教師の視点で、対象となる子どもたちやその子どもたちを取り巻く環境を把握することです。「何をするか」ではなく、「何のためにするのか」を明らかにするための第一歩です。把握した状況から何が言えるのかを明らかにします。「子どもたちを取り巻く環境は、・・・・・・や・・・・・・といった状況や変化を起こしていると言えるのではないだろうか」という整理をします。

このような整理を行う手法として、ここではロジックツリーを使用します。この手法は、上流側から下流側へ考えを整理できる共に、グループ内で各項目について、「なぜそのようなことが言えるのか」、「何を示しているのか」などの深い議論が行え、グループ内の認識や概念の共有化が図れる利点があります。一般的に、KJ法やブレインストーミングではこのようなプロセスは少ないことから、後に問題になることがあります。

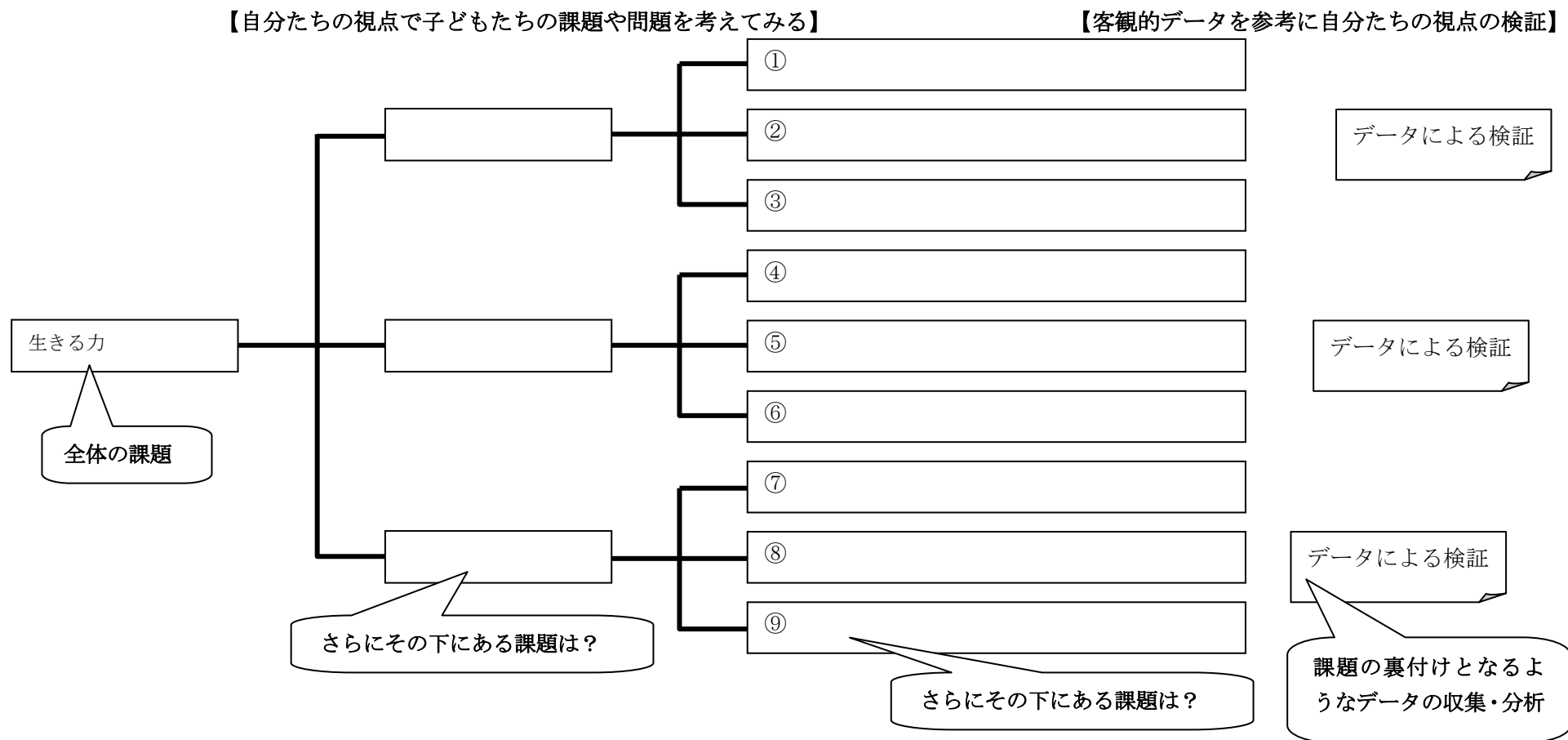
ツリー化とは、階層構造をつくることです。例えば、1つの問題がある場合、その問題を起こしている原因を3つ挙げます。さらに、それぞれの原因の背後にあるものを、それぞれ3つ挙げます。このようにブレークダウンしたものを「ロジックツリー」と呼び、問題や課題、その背後にある原因などを体系的に整理し、結論の根拠や具体的方法や問題の原因などを構造化して考えるために利用されます。



Step 2 : 課題抽出

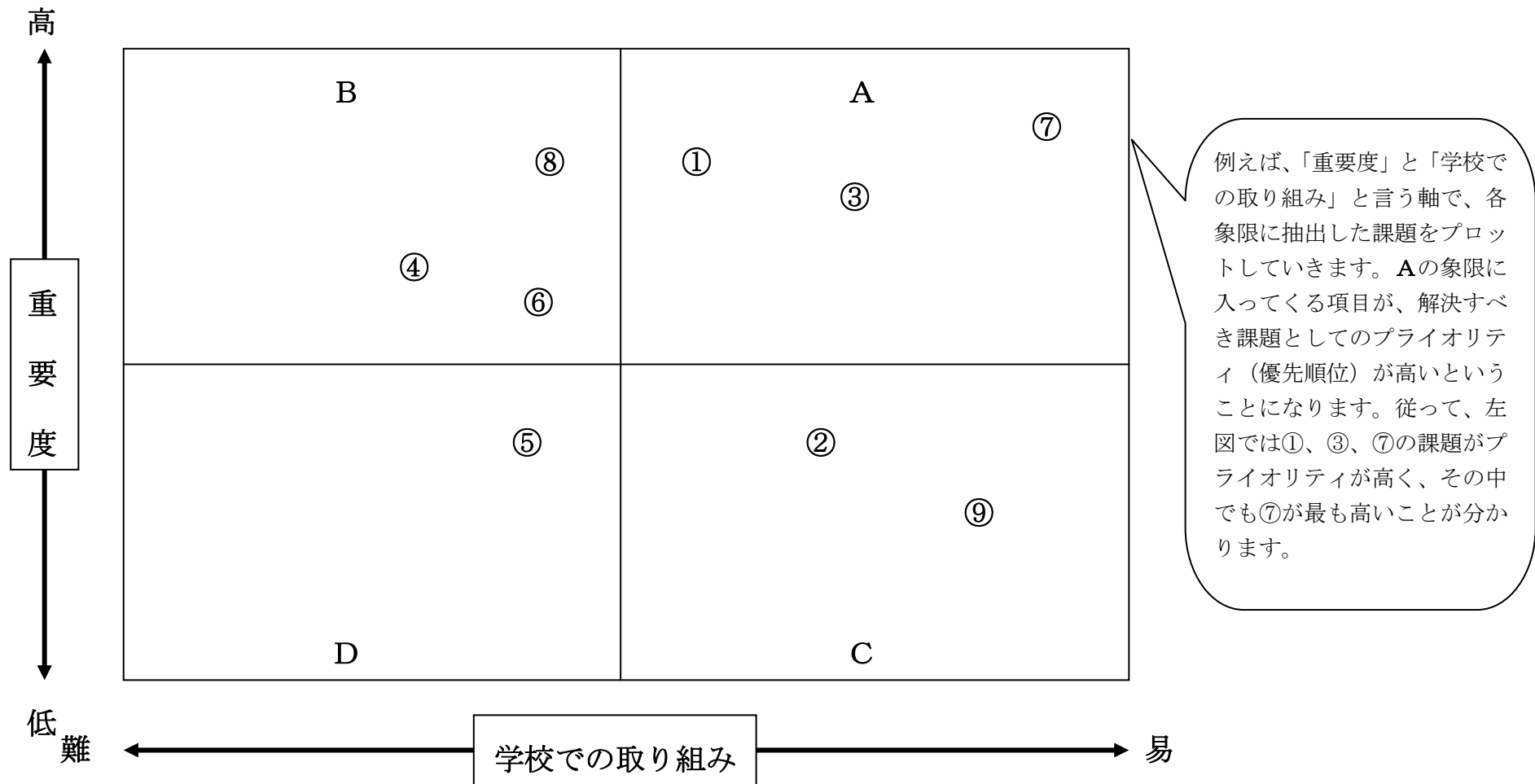
Step 2 は、課題の抽出です。把握した環境や状況の変化から導き出された全体の課題をより具体的にしていきます。「さらにその下にある課題は？」を繰り返し、解決すべき課題を具体的に分かりやすいものにしていきます。また、課題が思いこみとならないためにも、課題の裏付けとなるようなデータの収集・分析を行うことも重要です。

例えば、「子どもを取り巻く環境は、・・・・・・となっており、生きる力の不足を生み出しているのではないだろうか？」と明確な文章で表現できるようにロジックツリーを使って、課題の分析を行います。



Step 3 : 重点課題の決定

Step 3 は、抽出された課題のマトリックス化を行うことで、規準（評価）項目との相関関係や位置関係を見るためのスキルです。2軸のマトリックスは、位置づけや位置関係を知るだけでなく、方法の整理をしたりすることにも活用できます。例えば、「重要度と緊急度」、「重要度と学校での取り組み」や「指導法による効果と活動による効果」などを選べば、重点課題の決定を行うことができます。従って、軸をどのようなものを選ぶかが重要な鍵となります。



Step 4 : 重点課題の決定

Step 4 は、課題を目的・目標化します。目的・目標が網羅的であったり、曖昧であったりすると評価することも困難になります。特に、目標は評価の基準と考え、明確なものにしておく必要があります。Step 3 で行った重点課題の決定により A の象限に入っている項目が、解決すべき課題としてのプライオリティが高いということになります。A の象限の中から今回の環境教育で取り上げるべき課題を幾つかピックアップします。

